

谷津田だより(番外編)～小笠原諸島(父島・母島)の自然を訪ねて～

印西ウェットランドガイド 阿部 純

◆ 平成21年、4月の前半に小笠原諸島に行ってきました。

初めての長い船旅でしたが、波も比較的静かで片道25.5時間も苦になりませんでした。

谷津田だより(番外編)として小笠原の自然の様子を、5回に分けてお届けしたいと思います。

第1話

『メジロだけでなく、メグロも見られます』

◎東京竹芝桟橋からほぼ真南に1000キロの洋上に散らばる大小32の島が小笠原諸島です。4/7の午前10時に出港したおがさわら丸(6700トン)は、4/8午前11:45に父島の二見港に入港しました。波も静かで船酔いもせず快適な旅でした。今回(1回目)は、この父島からさらに南に50キロ離れた母島(父島から2時間)での話題です。

絶海の孤島 母島



・宿舎は、港からすぐ近くのところの位置し、緩やかな坂の上に建つ島のロース石を配した素敵な建物でした。入口手前の坂下に何とパイナップルがなっていました。青い実の中の1つか2つは、すでに黄色く熟していました。

ふと見ると黄緑色の小鳥がその実をさかんにつついていました。

内地でもツバキにやってくるメジロです。

絶海の孤島に見られるこのメジロは人の手により持ち込まれた個体が野生化したもので、いまでは母島・父島どこでも内地のスズメのように見られます。

南崎遊歩道(母島)で撮影したハハジマメグロ
(国指定特別天然記念物)



後から後からやってくるメジロの姿をしばらく見ていますと、少し大きめで動きが一寸異なる個体やってきました。

メジロより頭部分が黄色っぽく背中がいくらか濃いようでした。

そして何よりも白いアイリングが特徴のメジロとは異なり、目の周りに三角の黒斑が目立っていました。

これが国の特別天然記念物・絶滅危惧種指定の世界的に貴重なハハジマメグロでした。

初めて見る姿に夢中になり、シャッターを押すのを忘れてしまいました。

・夜になると、暗闇の中から「ヒューヒュー」と鳴くトラツグミの音が不気味でした。また朝は窓外の林の中でウグイスのさえずりの声が賑やかでした。

このウグイスも内地の種とは異なるハシナガウグイス(固有種)で、さえずり方が少し違いました。

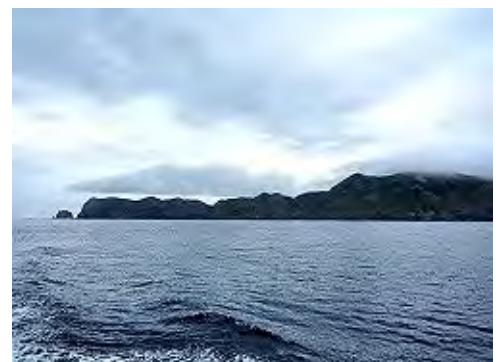
小笠原にはメジロのように人に持ち込まれた動植物もありますが、海洋島であるので基本的に固有種だそうです。見るものすべてが珍しく外を歩いていると疲れてしまいます。まさに「東洋のガラパゴス」といわれる島でした。

第2話

『タコの木や木生シダのジャングルに驚き!』

◎小笠原諸島の最大の特徴は、島の誕生以来一度も大陸につながったことがないことです。島に生息する動植物は海流、風、鳥などに運ばれて漂着し進化を遂げたのです。

東京から南に1000キロ
小笠原父島



- ・天然の要害ともいわれる内地と週1でつなぐ父島の二見港に入港した“おがさわら丸”を降りると、ペンションオーナーF女史が笑顔で迎えてくれました。

このペンションは小笠原父島では初めての分譲地に建ち、フィンランドログの木の香りが嬉しい宿でした。心のこもった島料理については後日の報告とします。

この宿を選んだのは、HPで「ベランダから蝙蝠が見られます」でした。中抜きで5泊しましたが、毎夕6時から6時半の30分はずっとベランダで空を見上げていました。

「とろにゃん」
父島ペンションKの猫



一度絶滅したと思われたオガサワラオオコウモリの飛翔（毎日20～30匹）が見られました。このコウモリは原始的な種で、超音波で飛ぶ種と異なり自分の目で見ながら飛ぶそうです。羽を広げると1メートル近くにもなり、時々木につかまりそこない落ちてしまうこともあると聞きました。このコウモリが、ベランダの上空を飛んで行くのです。果物を主食とするためフルーツバットと呼ばれています。

国天然記念物オガサワラオオコウモリの飛翔



- ・私も野鳥の会ですので、メグロのほかにも幻の鳥 国の天然記念物小笠原固有種アカガシラカラスバト も見たいと思っていました。ただこのハトは30羽しか生息していない希少種でまず遭うことは難しいそうです。サンクチュアリの一つの子育てが終了し、一部区域に入れるようになったと聞き、ガイドとともに出かけることにしました。
- ・やはりカラスバトには会えませんでした。ジャングル内の種々の植物群に囲まれ日本にいるという感覚が消えてしまうほどの素晴らしい体験ができました。ジャングル内で感激した植物群の中から一つ取り上げてみます。

・オガサワラタコノキ

小笠原の景観を代表する常緑高木、幹の高い所から発根し、あたかもタコが足を広げて見える所からこの名がついたといひます。その足はまるで眼があるかのごとく土を求めて伸び続けます。

何メートルもあるタコの足は生命のたくましさを感じました。そしてまた滑稽で愛おしさすら感じました。

- ・その他にもオガサワラビロウ、木生シダのマルハチ、沖縄から移入したというガジュマル等鬱蒼としたジャングルを構成していました。

出かけた日は小雨が落ちていましたが、鬱蒼とした各種のシダ類、亜熱帯・熱帯性の樹木の葉が傘の代わりになりほとんど傘は要りませんでした。

ジャングルに聳える木生シダのマルハチ



- ・また何人かで手を伸ばさなければ周りに届かない島ツバキ、ムニンヒメツバキの木には圧倒されました。

それからジャングル内でなくても車道の道端にパイナップルの実やバナナの実が熟している。それが、南国小笠原諸島なのです。

- ・ガイドの案内で散策した森の中で、なによりも心に残ったのは「適応放散」と言い、流れ着いた種子が周りの環境によって変化して現代に至る。その適応放散の実例が、固有種の樹木シラゲテンノウメとタチテンノウメで見ることができました。わずか5メートルしか離れていない場所に異なった進化をした樹木が見られたのは何とも不思議な感じでした。

- ◆タコノキ…タコノキ科の固有種。島では葉を利用したタコの葉細工が人気で、多くの観光客や愛好家に親しまれている。「小笠原の町の木」に指定されている。今回は、このタコの葉細工の弁当箱を買ってきました。

第3話

『戦跡を歩く』

◎（ちょこっと歴史）

小笠原諸島は文禄2年（1593）、信州松本の城主小笠原長時のひ孫、貞頼が発見たと伝えられています。

初の幕府の調査隊は延宝3年（1675）島谷一左衛門の唐船によるものでした。

その後ずっと放置したままで、最初の定住者（1830年）は日本ではなく欧米系5人とハワイ系の人々でした。その後、文久元年（1861）英国領となっていることに驚いた幕府は、咸臨丸を派遣し領土の宣言をしたのでした。が、国際的に日本領土と認められたのは明治9年（1876）のことでした。

その後は、ご存知のとおり太平洋戦争の渦に巻き込まれ、強制疎開や米軍による統治、島民の帰島が許されたのは昭和43年（1968）、小笠原諸島が日本に返還されたときでした。

このように日本の中でも特異な歴史をもつ土地だったのです。父島扇浦地区に貞頼神社があります。

（戦跡）

- ・父島扇浦から車で北へ5、6キロ、夜明山につきました。

小雨が降っていましたが、亜熱帯性植物が茂るジャングル内ではさほど雨は気になりません。

ガイドのYさんの後ろを進むと早速洞窟の入口が見えてきました。地下に掘られた塚でした。塚によっては、かがまなければ入れないほどに天井の低いものから高さ数メートルもある大きなものまでありました。

暗闇を抜けるとそこには、大型の大砲が崖をくり抜いた窓から海を睨んで備えられていました。しかし現在、そのほとんどの窓の外は伸び育った樹木で覆われ海は全くというほど見えませんでした。

小笠原諸島の中でも硫黄島の玉砕戦は誰も知る所ですが、ここ父島も空爆と艦砲射撃により千人余りの犠牲が出たそうです。



夜明け山の山頂付近に放置された大砲（父島）

- ・また山頂にはトーチカの残骸がむき出しになり、洞窟そばには兵士の生活がそのままかがえる陸軍のマークの入った茶碗や「麒麟ビール」の右書きの文字入りのビール瓶が転がっていました。

陸軍のマーク入りの皿や麒麟ビールの文字入りの瓶など散乱（父島）



- ・島に行ったら、まず戦跡を訪ねようと思っていた私ですが、上陸した日に訪れたビジターセンターで見た「硫黄島玉砕」の映像と、実際に訪れた戦跡を目の当たりにし、ボニンブルーの美しい海と悲惨な歴史のギャップの大きさに戸惑うばかりでした。母島でも静沢地区の戦跡を歩いてきました。

その際、ジャングルの中でムラサキオカヤドカリを見つけました。この種はオカヤドカリ同様にアフリカマイマイの殻を背負っている天然記念物指定です。

天然記念物のムラサキオカヤドカリ（母島）



◆ムラサキオカヤドカリ…オカヤドカリ科の広域分布種。

産地はアジア、太平洋地域。甲長40ミリ前後、小笠原では本種が最も普通。数の少ないオカヤドカリ同様に天然記念物に指定されている。

第4話

『小笠原のダイナミックな自然に驚嘆』

◎出かける前に知人のE氏のアドバイスは、各所でためになりました。そのうちの一つ「お天気がよければ、船に乗ったらできるだけ甲板にいるのがいい」というアドバイスの通り、できるだけ甲板に出ていました。500ミリレンズを装着したキャノンEOSは重く持ち続けていると結構きつかったですが、いくつか良い場面に遭遇できました。

今回は船の上での出会いについて報告します。

- ・遭遇その1「往路での小さな出会い」

片道25.5時間の船旅のほとんどは水平線上に何もなく青い空とそれ以上に青い海だけでした。何かに出会えるのは島の近くを通る時がチャンスなのです。東京湾の外に出るまでは、スローで進んでいました。その間はセグロカモメなどの数種のカモメの姿がずっと見られました。

房総半島沖を南下すると今度は、数多くのミズナギドリ（種類は不明）が群れているのを撮影しました。

その後の数時間は、ミズナギドリの飛ぶ姿を遠くに見る位でした。

Aデッキの展望喫茶脇にあるテーブルに陣取って いた私の頭上を「チッチ」と鳴きながらよぎる小鳥の姿がありました。「アトリ」（スズメより少し大きいアトリ科の小鳥）だ。

甲板に立つポールと屋根の間を歩き来している小鳥の姿に近くにいた乗客もみなびっくりしていました。

船と一緒に旅をする「アトリ」



・遭遇その2 「偉大なる海の紳士」

母島から父島に戻る途中のことでした。ジェントル・ジャイアント（偉大なる海の紳士）と呼ばれているのが、ザトウクジラのジャンプです。

ボートでクジラを求めて沖に出るホエール・ウォッチングツアーは、島での観光の目玉にもなっていました。日程も合わずこのツアーに行かなかった私は、丘の上からクジラの潮吹きやジャンプを見たり撮影をしていましたが、近いといっても50メートル位はあり肉眼では小さな点にしか見えませんでした。

ならば定期便の甲板から撮影しようと母島で乗船してからずっとカメラを構えていました。その瞬間は突然やってきました。数メートル離れていた乗客が「クジラ」と小さく叫んだすぐ後、ブリーチング（ジャンプ）の音が聞こえんばかりの距離（50メートルほど）にザトウクジラが現れました。2枚撮影しましたが、撮影できたのは1枚（尾びれ）だけであとは波間に漂う泡だけでした。甲板でのこの出会いは大きかったです。

E氏に感謝です。

ダイナミックなザトウクジラのジャンプ（尾びれ）



◆ザトウクジラ…ヒゲクジラ目ナガスクジラ科ザトウクジラ。

体長12から14メートル。体重30～40トン。全海域に分布する。冬は小笠原をはじめハワイ、マリアナ、沖縄、台湾など、夏はアラスカ湾、ベーリング湾、アリューシャン列島、オホーツク海などを回遊する。寿命は50年から60年。3～4月は子育てのため小笠原の海にやってくる。

・遭遇その3 「帰路での発見」

父島を午後2時に出港してから23時間余り、東京湾に近づくとき大型船舶やクレーンを備えた工作船などが多く見られました。

双眼鏡でカモヤカモメを探していると形が変わった船が目につきました。1キロぐらい先ですが、目を凝らすとそこには浮上した潜水艦2隻がはっきり見えました。

潜水艦発見でした。遠くには、潜水艦の姿も見られました。



カツオドリが船のすぐそばにやってきました

第5話

『島の味と移入種問題』

◎小笠原の味覚についてお伝えします。島での食材の種類は内地と比べると極端に少ないのです。生活のすべてをおがさわら丸に頼るのですから、もっともなことですね。食材の豊富な日は船の入港日と聞き、入港日に菓子パンが買いたくて店に行ってみたらあんパンなどが冷凍の状態で行くつか並んでいました。それらもちまち売り切れそうになり、あわてて購入した次第でした。

乳製品や肉類などの食材はもちろん生活必需品も同様のようでした。母島について翌日の午後は島にある3軒の店すべてが休みで困りましたが、これも入港・出港日を中心に生活のリズムが構成されている島での暮らしから考えると当然なのですね。

このような条件の中ですが、島の味はやっぱり素晴らしかったです。印象に残ったいくつかの味について報告します。

・島の味 その1 (メジマグロ)

宿の夕食に赤みで厚く切ったお刺身が出ました。

見た目は脂の乗った旬の鰹といったところですが、さっそく聞いてみたところ「メジマグロ」とのことでした。甘みがあり、歯ごたえのあるしっかりした味がするこの種は、マグロの王様といわれる本マグロの幼魚だそうです。

宿のオーナーで現役漁師のご主人自慢の一品でした。おいしくて瞬く間に平らげてしまいました。

・島の味 その2 (カメ)

書こうかどうか一寸迷ったのですが、報告します。小笠原に来るカメは、アオウミガメが大半です。

巨大なものは甲羅の長さ1メートル20センチ、体重200キログラム以上という“環境省指定希少種”ですが、ここでは刺身や煮込みで食べる食習慣があります（ハワイ島から持ち込まれた食習慣）。

この味は積極的には希望していませんでしたが、興味はありました。このアオウミガメの刺身が母島最終日の夕食に出て早速完食してしまいました。味も見た目も馬刺しそっくりでした。カメさんごめん！

・島の味 その3 (パッションフルーツ)

これは、美味しかったですね。話聞いていたが見るのも食べるのも初めてでした。最初の出会いは父島で個人でやっている森の中の喫茶店で飲んだジュースでした。

南国のフルーツなので癖があるのかと思ったのですが、爽やかで飲みやすく美味しかったです。

2度目の出会いは父島の宿で出た実を2つ割にしたものでした。アボガドほどの大きさで球形の実の中には石榴と同じように小さな種がぎっしりとつまり、それを匙ですくって食べるのでした。この時期はまだ収穫できず、冷凍のものしかないそうですが甘く優しい味が後を引きまします。6月ごろから収穫できるというので、いつか島に行くことがあるなら6月以降がいいですね。島の味覚の王様です。



・島の味覚 その他【無人 (BONIN) コーヒーと島レモン、そして島寿司 etc】

日本で唯一小笠原の父島でコーヒーが栽培されているのです。

昨季の収穫は全部で60kgのみ。一昨年は台風により収穫0だったと聞きました。（値段の）高いのもやむをえないですね。

島レモンは球形で酸味が少なく青いうちに利用するそうです。母島特産のラム酒に四つ割にした島レモンを絞ると最高でした。ジャムにも適しているといえます。

島寿司は鯖などを握り、なんとワサビでなく洋ガラシを乗せて食べるのです。

島なので食べるものにはあまり期待をしてなかったのですが、このほかにも島トマトや青い実のパパイア、島でとれたバナナなど食通なら毎日飽きないほどの食材がいっぱいありました。



◎最後に島の生態系を乱す生物の一部を報告します。

・移入種 その1 (メジロやトラツグミ)

どちらも人が意図的に持ち込んだものです。それが野生化し増えているのです。メジロはとにかく多いです。スズメやドバトのいない島で人の近くで一番目につくのがこのメジロとイソヒヨドリでした。

メジロは、特別天然記念物のメグロとほぼ生活が一緒に競合してしまうのでメグロの減少につながってしまいます。

トラツグミは内地では愛鳥家の探鳥のお目当ての鳥ですがこれが結構多くいます。天敵が少ないからでしょう。夜「ヒュー、ヒュー」と不気味な声で鳴いていました。



・移入種 その2 (グリーンアノール)

北米産で小笠原で見られる外来種の代表格で、樹上の昆虫を次々と食べてしまう緑色のトカゲです。

これは道路を歩いている、宿の窓の下を見ている、どこでも見られるくらい数が多かったです。



・移入種 その4 (その他)

崖の斜面に見られるノヤギや特別天然記念物指定のアカガシラカラスバトを襲うノネコ、ほかにもアフリカマイマイやウズムシなど困っている種は多いようです。

海洋島の自然が少しずつ壊されていくのはたまりませんね。

◎おまけ

母島の港にサメがいっぱい。ネムリブカといわれる昼寝をしているかのように海底で横になっているおとなしいサメのことです。大人しくこのサメがいる所でシュノーケリングやダイビングの教室をされるといいです。たしかに動きも鈍くこわそうでないが、海中でこの顔をまともに見たら誰でもぞっとします。顔は耳まで裂けた大口を持つやっぱりサメの顔です。



◆移入種・外来種…小笠原諸島は、日本列島から遠く離れているため、独自の進化を遂げた固有の動植物が多く生息し「東洋のガラパゴス」とも言われています。その貴重な自然に異変が起こっています。小笠原にはいない生物(外来種)が入ってきて、小笠原固有の生物に悪影響を与えているのです。